

アカデミアにおける生物統計家として
山本 紘司 (横浜市立大学医学部臨床統計学)

現在 10 年強医学部で生物統計家として働いてきましたが、本稿ではこれまでの経験や活動を踏まえた上で、これからどのように生物統計家として貢献できる(したい)かを、僭越ながら率直に述べたいと思います。ここでは主に医学分野における統計の意で生物統計と呼ぶことにします。

私自身は学生時代および学位取得後 2 年弱は助教として、数理統計学の研究室に所属しておりました。数理統計学を専攻していましたが、生物統計にも関心があり、その後、縁あって大阪大学医学部に異動し、そこから現在に至るまで異動はありましたが、ずっと医学部に勤務しています。医学部と言っても、医学部附属病院内のいわゆる ARO 所属であったり、医学部内の講座所属であったり、その兼任であったりと様々な部署・役割を経験してまいりました。初めて病院勤務となった際にはそれまでの環境との大きなギャップにとまどいましたが、そこから生物統計家としてのキャリアが始まったと思います。

大阪大学医学部では医師主導臨床研究に生物統計家として関与することが主務(以下、ARO 業務)となり、数多くの臨床研究に携わることができました。また、統計に関するよろず相談という形でコンサルテーションも同時に行っていました。数年後には生物統計関連の寄附講座にも所属することになり、ここでは研究員や大学院生もおり、彼/彼女らの教育も行うようになりました。ひたすらに日々の業務と研究、そして学生教育をこなすことに精一杯でしたが、思えばこのときの貴重な経験があったからこそ、私自身の現在考えるなりたい生物統計家像も見えたのだと思います。

様々な考え方があることは承知の上で述べさせていただきますが、私自身が考えるアカデミアにおける生物統計家は、生物統計に関連する実務に携わり、かつ生物統計の研究者でもあることです。ARO 業務は生物統計家としての重要な仕事の 1 つであり、私自身臨床研究に第一線で関与し続けたいと考えています。それは臨床研究に生物統計家として参画することで医療への貢献を身近で感じられる“やりがい”があるからです。しかし多くの臨床研究に関わりたいと考えるのはそれだけが理由ではなく、“生の”臨床研究に関わることで様々な課題に直面でき、その課題の中には統計的に解決可能と考えられるものもあり、これがまさに生物統計学分野の研究となるわけで、そのような研究テーマに出会えることも大きな理由です。このような課題を解決していくことは生物統計家の重要な仕事であり、生物統計家にしかできない、また、生物統計家がやらなければならないことでもあると考えています。ただし、日々の ARO 業務をこなしつつ生物統計の研究を両立していくことは並大抵のことではなく、これは身をもって実感しています。残念ながら現在もこれらのことが十分にこなせているとは言えません。

しかし、この先アカデミアにおける生物統計家をもっと増えれば、現状では十分に対応できていないと感じている両立すべき事項も、余裕をもってこなせるような日が来るのではないかと期待しています。そのためには、とくにアカデミアに所属する生物統計家を育成していくことが重要であり、この人材育成にも注力していきたいと考えています。ご存知のとおり日本のアカデミアにおける生物統計家は一昔前に比べるとかなり増えたと思われますが、それでもまだまだ世界的には少ないのが現状です。このような状況を改善していく一助となれるよう、これからも微力ながら尽力していきたいと思っています。

最後になりますが、今の私自身が歩んでいる道、そしてこれから歩むであろう道は、これまで出会った

多くの先生方, 諸先輩方, そして後輩や学生らによって支えられています. この場をお借りして深く感謝申し上げます.